

貸出用

人口問題研究所  
研究資料第八号

昭和三年十月

最近アメリカに於ける人類學的研究  
の動向とその概念についての摘要

原著…… *The science of man in the world crisis*

Ralph Linton 1945.

……ヨリ抄録……

厚生省 人口問題研究所

# 世界危機に於ける人間の科学

ラルフ・ハリントン著

(著者に依る人類學の領域と目的)

現代は世界史に於いて超自<sup>然</sup>なるものに限を向けるより、寧ろ援助を求め、科学に人々が眼を凝らし、してゐるその最初の時期である。

斯る援助を余りにも屢々求める人々は何等かの疾病の元での救済を得る事もなく、又その治療の計畫も何等なく特殊専門家より特殊専門家へと方向を轉<sup>ら</sup>れてゐる一つの病<sup>の</sup>位置にある<sup>自己</sup>自身を見出す事は不幸な事である。

科学は<sup>然</sup>自<sup>然</sup>學即ちそれを学ぶに特別の技術を以て世界を眺めると言ふ特殊な方法として始つたのである。その初期に於いてそれは社会の哲學に匹敵し得る全般的普遍性を持つてゐた。然しそれが生存する権利をから得たのはアメリカの<sup>然</sup>分<sup>裂</sup>經過によつてこれ自身を普及し始めた時、然し早くはな<sup>い</sup>。それは一つの科學である事を止めて一系連の科學の代りにその各々がその興味を持ち、<sup>然</sup>自身<sup>の</sup>無制限の對象を持つたものになり終ふたのである。

1 かのアメリカに於けるこの結合が彼両方のエネルギーが注ぎ付けられるとの利益を知つてゐるのであるが然し多くの科學者は今獨斷の事を學ばねばならぬ様に思はれるのである。此處百年

間に於いてはその傾向は各科學者は夫に一定の安全な領域を置いて自己保全を怠りしむれば自ら其の身を  
に撰んだ學を氣まゝに食ふ事を以て研究と稱しより以下のより少くもそのについてより多くのもの  
のを練り返し學んで来たのが現状である。

一面この科學はこの時期に於いて得られたる實際の知識の廣汎なる蓄積に買ひかゝる事は疑ひもな  
い事であるが、<sup>一</sup>つは<sup>二</sup>決定的な態度而もその初見たるや鳥鹿鳥鹿しく<sup>三</sup>の<sup>四</sup>借して見せてゐるもの  
を表示してゐる。

如何なる科學者も<sup>一</sup>二が今日ある如き科學知識を<sup>三</sup>自<sup>四</sup>ら<sup>五</sup>得たと<sup>六</sup>言ふ事は不可能である事  
は事實だが、どんな人でも彼自身以外の若干の科學に於いて到達せられた結論を知り、<sup>一</sup>それ等も彼自身  
の問題に應用する事は全く可能である。その結論は比較的單純であり科學の縁に生れ  
として生ける人間及び彼等の問題を取扱ふ此等の科學の新しい統合は<sup>二</sup>此の時期が<sup>三</sup>熟してゐる様  
に思はれるのである。

一、「人類學」について

概して斯る真の定義に依れば人類學こそがその地位に對して最も人氣を呼んでゐるものなのである。  
凡ての英語を誦す國に於ては、この人類學を<sup>一</sup>生命學<sup>二</sup>は人間及びその住居に關する科學<sup>三</sup>を<sup>四</sup>是  
味するものと解せられ<sup>五</sup>ゐる。ヨーロッパでは<sup>一</sup>それは幾分異つた意味が與へられて<sup>二</sup>起り<sup>三</sup>人間の身

体的特徴の學に限定せられてゐるが我々は廣く定義に執着するものである。その全き歴史を述べて人類學は動物學や生理學や遺傳學の如き親しい科學では一つの重要な分野に於いては異つたものであつた。此等の科學が夫等が自然の中に獲得した所なら何處でもある制限せられた種類の現象について學注して行つた場合人類學は單なる學問である人類學にその興味を集中し夫等が與へる如き凡ゆる現象を理解せんと努力して来たのである即ちその奇妙な兩足動物として更に奇妙なる彼が振舞について知られる可き凡ゆるものを発見せんと試みて来たのである。二本は科學の中でその立場を改良したかつたのであつた。自然科學や内外科學に從事する人には錯謬を正すると人類學者も一個の時代錯誤者即ち十八世紀に於いて殆んど凡ゆる專斷について何かを知るが然しその事についてはこれ程多くは知つてゐない愉快なる紳士階級の最後の子孫者と見做して来たのである。

而し乍ら人類學を考へるに常にますます明らかになりつゝあるその必要性と結びつける一連の科學の中でその最初のもののであるとして見做す事は同様に可能なのである。

著者は次の様に感ずるのであるが人類學者の多くが他の科學の技術や結論を喜んで使ひ彼等が科學の限界に對して多くの注意を拂ふ事なく進んでは何等其法後害の徴候を来さない所なら何處でも問題に對して従つて来たことか非れと言ふ事は人類學者の信用にこれを及れ決して不信用に存するものではないと思ふものである。

斯の最もよい、恐何を言ふたにも抱えず人類學に對する特徵付きた原子論的傾向を懸けるが  
 出来なかつたのである。人類學が包まんを試みて来たその分野は大變廣く又大變多くの異つた種類  
 の現象を含んでゐるのである。直接にその全體を知悉する事が出来ないのである。故にこれは分  
 ち中で觀じたい型に従ふ各々おものから自ら自身再調査のグループを發展せしめた様な無数の亞科學へ  
 と分れて行つたのである。この事は斯る亞科學の正確なる限界や其等の比較的重要性等について小  
 さな内考せよであつたのであつた。然るに吾等現代の傾向としては此等の限界について注意は低下し  
 て殆どないものとなり知つて居て此等の亞科學は一つの却つて人間の生存を理解する事に對して  
 益々多くの重要なものであると言ふべき認識する様になつてゐる。人類學内での最も鋭い内証は科學と  
 言ふ處の定義に下申されたその線に沿つて人間とその存在との間に於ける差別と言ふ事であつた。  
 一個の動物即ち多くの哺乳類の一つとしての人間についての學問は殆んど専ら自然科學によつて展開  
 せしめられた技術や結論に依つてゐる。實際人類と言ふものが實驗の對象に親切にもせられない  
 ものである以上それは其の技術のほんの一部しか使用する事は出来ないのである。

何處何處も人類學は動物實驗によつて若干の疑を解決する自然科學をまた來はならなかつたのであ  
 る。斯くして人類について此を統御して育成して行く事は全體主義國家に於いてさへも大なる困難  
 を承してゐる。人類學傳の理解や我々が人種と呼ぶ人間の多様性と關係した色々の問題の解決は程

猿猴や鳥に關する遺傳學的業績がその必要なる指示を與へてくれるまでには不可能であつた。又一方人類の行動についての學問は自然科學の發見したものは悉くと助けを乞はざる事は出来なかつた。最も單純なる行動現象例へば變化を知ると言つた様なものの幾つかは動物で又實驗的技術によつて學ばれ得るが支那の多くは動物水準とは密接に平行してゐるものでない。この事は有組織化した社會的生活に含まれてゐる適合現象については殊に眞實である。この分野に於いて人類學者が社會科學によつて發見せられた技術の若干を使用する事は出来るとはいへぬ。これは新技術の發見に期待しなければならなかつたやうな状態に在るのである。新技術等は技術が社會科學から受けて来たと同様に此等の科學の發展に全く寄與する事が出来て来たのである。

## 二、(人類學の區分)について

人間についてと人間の仕るについてと個々に取扱ふ人類學の二大區分は身體人類學と文化人類學として知られてゐる。この區分は人類學の全く初期に遡るのであり科學の各分派が發展せしめ自身の線に従ひて小自身の専門家のグループを産んで来たのである。

相互に廣くこの二つの分野の接觸を保ち續けた結果を持ちながら兩方の分野で活動しこれに精通してゐた人此と言ふものは極めて少いのである。一時はこの分化が永久的のものであり得る

様にも思はれたるのである。即ち身体人類学については完全に自然科学と並置せられる様になり文化人類学は社会科学と並置せられる様に思はれたのである然し乍ら夫等は今や我々が次第に文化面にある生理学的要素の影響をも又その逆をも意識する様になるにつれて再び一體のものとなり始めてゐる。この経過は生体人類学の分野に於ける一種の復興によつて補強せられたのである。先づ骨格や肉厚を計測したり人種分類の組織等が行はれた時代を経て生体人類学は更に動的なものへの學問に轉換し始めてゐる。斯る文化的要素に於いて考慮に入れられぬと言ふ事を認識し始めてゐる。人類学の主たる部分の各々は更に細かく分割を行つてゐる。即ち身体人類学は分れて古生物学と生体人類学となり文化人類学は考古学人類学、言語学（<sup>種</sup>）となつた。此等並科学の名前は一寸怖氣つかせるものであるが科学とれ自身或は少くとも夫等の更に華たしい愛見物（遺物）は多くの讀者に親しいものである。古生物学は我々の種の起源や進化と殊に此等が化石によつて示される場合これを取扱つてゐる人が若干の古代の半人間形成の別な断片の遺物について讀みそれが現代人と如何に關係するかを論議する毎に彼は人類学のこの分派と接觸する様になるのである。これは今次大戦前、科學は於て最も迅速に發展して行つた領域の中の一つでありあつたのである。

古いものでもどれが人類系統樹に属してゐる場所について毎年毎年新しい遺物と新しい論争とが行

はれた。この分野の調査研究者は数に於いて缺けてゐるものも熱情に於いてより以上補償して来た。その遺物の極度に断片的性質、此等の多くのものが一種類のものであつたと言ふ事實は戰場での指搦に對して人類についての古生物學者に更に余地を單純に與へてゐる。斯る仕りに關しては、先から現れて来た全く論争のない事實は人間と猿との間に多少とも混合した無数の古代人類があつたと言ふ所及び此等の中若干は現代人の祖先で在り得るものと言ふ事である。何れが正確な事柄を持つてゐるかは、今なほ未決定な疑問である。此の矢はれたる中間的人類が前後に設定確立せられたとしても、それらも彼等の現在の困難性に於いては彼の子孫に對して多くの助けとはならぬであらう以上人類学のこの分野の結果は現在の諸家の論文集より除外せられ、兼てある。

### 三、(生体人類學)

生体人類学は凡て彼の身体的觀念に於いて現代人を取扱ふものである。脊椎動物及び哺乳動物としての我々の種の一般的特徴は解剖学や生理学の如き一般科学によつてよく注意せられ、従つて生体人類学者は人間の多様性相違の研究及び此等の差異の蓋然的な原因に集注する。ごく最近まで彼等の注意の大部分は種々なる人間の多様性の分類、即ち人種と言ふものによつて彼等の可能な關係に集注せられた。彼等が發達せしめて来たこの分類は今では單純な表面的な特徴例



へば皮膚色素とか毛の形とか言ふたものに主として依存してゐるのである。最近ほこれ極顯著かつはま  
 いが眞にもつと重要なる差異即ち血液型とか筋肉組織に於ける差異とか言つたものに注意が向中  
 られてゐる。更に最近では生体人類学者は成長率、性的成熟の時期、新陳代謝率及び病氣の免  
 疫性等に於ける集團差を研究し始めた。

此處で彼等が発見したものは直接に實際の價値を持つたものであらう。

特殊の人間の多様性の中、類型はそれが社会的意味を與へるやがある場合を除いては殆んど重要  
 性を持つてゐない然し乍ら高度とか氣温とかある條件に對して特殊な變化を調整するを又け  
 マリヤに對する。その遺傳的の抵抗などは如何なる再鎮靜の計畫に對しても極めて重要なるもの  
 であらう。ある地方で大變元氣よく誤用せられてゐる人種 of 全概念の訂正は生体人類学 of 分野内  
 にあるものであり我々は社会的水準とは異つた生理學的水準に於て人種と關係する此等の諸問題の  
 終局的決定に對しては生体人類学に頼らねばならぬのである。不幸なることに斯る問題が少数者の  
 限られてゐる。ある人種がある環境に於いては他のものよりも善いと言ふ論證も得可きる筈と内  
 別に現世界に於ける人種的差異の主なる意味は夫等の向題と結びついて社会的價値に存するもの

である。我々の現在の軌轍は人種的差異に於いて固有なるものから発するのではなく斯る差異が社会的状態の指示器として使用せられるに到つたと言ふ事實から起るものである。我々自身の社会に於ける普通の個人と言ふものは色やヨーロッパ人種型の何れが彼の友人の大部分に居してゐるかと言ふことは全く出来ない従つてこれは何等社会的重要な問題でない。同時にその個人が猶白人か黒人とかの如く若干の社会的に区別せられた群に居してゐると言ふ事を此等が指示する場合でも彼は身体の型に於いては極めて小さい差異を意識するであらう。

#### 四、(文化人類学と言語学)

文化人類学及びその近科等の領域に眼を轉ずれば我々は次の事を発見する。即ち言語学の亞科學は現在最も孤立したとして自ら限定したものであると言ふ事である。

言語に関する研究は人間活動の他の方面と殆んど無關係に進行され得るものである。又廣く遂行されて來てゐるものである。殊に所謂原始民族での言語のたゞなる多様性及び夫等の奇妙な複合構造は研究者に研究の無限の資料を提供する。斯る研究の結果を以て示す時は素人は猶ほ、  
ヒ  
とエイブマルチンの金言を想起しそつである。即ち人間の多様性の分類がほかにその第一歩にある様に、  
言語の分類に到るまでは数年かゝつてゐるのである。

言語及びその複雑性に於いて科學者は個人及び集團の心理學に於いて、より深い水準を理解する  
 る事に対しての大きな價值を究極に於いて証明す可き一つの道具を持つてゐる。例へば我々が言語を最初に  
 交際手段として考へる様に教へられるにしてもそれは考へる事に於いて一つの道具として自然に重要  
 である。これは存在する言語形式の廣汎なる範圍が最も意味のあるその場所である。如何なる  
 考へもそれはもしも話す人が十分に時間をとるならば如何なる言葉に於いても通ぜられ得るもので  
 あるが、凡ての言語形式の集積部分であるその概念は個人の考へ方と異なるものに微妙な影響を  
 持つてゐる。此等の概念は強制的で考へざるを得ないからである。何故なら夫等は全体として意識せられ  
 ないからである。一つの例へばそれはこれが明白になるに役立つであらう。例へば英語で無生命的性が  
 ないと言ふ事は凡て  
 我々の考へ方に精靈論的傾向を與へるものである。この無生命的性は中性と混同せられる可きもので  
 はない。英語では無生命的の物体に關係し得るが又生命的のもの例へば幽霊とか或は両親の不快  
 の危險を若干冒せば赤兒などに対しては關係づけられ得るものである。彼とか彼女と言ふ暗黙  
 の中に性に歸屬せしめられるものを持ったものは常に生氣を含んでゐる。斯る言語的表象の結  
 果は次の如きである。即ち我々が最も抽象的な概念で考へても無意識にこれに生命とその意欲に対  
 しての力量を與へる事なくしては如何なるものにも關係づけられは出来ないと考へるべきである。

我々は幾々が語り又は考へる事さへもその凡てのものを人格化されねばならない。抽象性について仕事をせんと努力する人々はこの人格化への傾向と絶えず戦つてゐる自分自身を見出す。彼等が如何に注意しようともそれは思想の彼等の明快さと言ふものと干渉するやがやの場合場合に滑り込んで来るものである。若しも英語が多くの他の言語と同じく一つの無生命的な性を持つてゐるとすれば抽象性に対して使用せられてゐる言語はそれ自身に於いて斯る傾向に対して絶えず修正を與へてゐるものである。らう。

結局次の中が注意せらるべきである即ち言語の研究は言語を修得する小細工と混同せられてはならない。言語構造に關して理解する事はこれ等が實際に一つの助けとなるであらうが決して必要なものではない。子供達や又何等文法の知識なく外國語と攝取してゐる人々の経験に氣を留めて見よ。

夫等・構造については仕合せにも何等知らないがまづも若干の言語を語するが出来る人々は決山にあるのである。言語学が結局人間の振舞ひや殊に人間の思想経路について理解するのに重要な價値あるものであらうと言ふ事は殆んど疑心得らねない事である。然し乍ら此等の線に沿ふ事は僅かに始められたばかりであり言語学は猶幾々の現下の諸問題を解決の向つて何等大なる貢獻をなす事が出来ないである。此の理由として現在の書物では無視せられてしまつてゐるからである。

文化人類学の分野に於ける二つの他の近科學即ち考古学と人類学は丁度人類古生物学が身体人類学の領域に於いて、生体人類学への傾向を帯びてゐると同様な相互の關係を幾分持つてゐる。

考古学は文化の起源や現在完全にも多様化してゐる此等の文化や文化相を取扱つてゐる。考古学は恐らく人類学の中で最も通俗的な分派であり、その発見物は一般の素人にもよく知られてゐるものであらう。種々な発掘の結果は常に新聞紙に報道せられてゐる。従つて單純なる場合を引用すれば、ぼんやりとした「エジプト王ツタンカーメン」と言ふ前には殆んど大主の世界の大名詞になつてゐる様なものである。一般に考古学書は記録にない我々の過去の部面を発見し解明しようとする努力してゐる。記録された過去の研究は歴史の分野に定められてゐる。

人間が記録を録し始めたのは精々六千年位であるかに人間が存したものは少くとも十万年を下らないものである。考古学者は彼の作業に對して多くの余地を構つてゐる。更に記入された記録が如何なる社会に於いても一般人の生活について多くを然るに告りてくれる。と言ふのは單に例外的な條件の下に於いてである。古代の筆記者は普通王様とか僧侶について書いたものであらう。ローマ人の如きよく証據書類の備へられてゐる文明についての我々の知識

でさへもポンペイの如き發掘によつて熱烈に増補せられたのである。考古学者自身に対してはこの科學は研究の快感を愉快に享受しと言つたのに結ばつてさすのである。之に加ふるに俸給と支出が増大便宜も與へてゐる。金持の後援者に対してはこれは實質的の眼に見える報酬を研究費に使はれた金に対しては與へ更に社会的現状を乱すかも知れない様な如何なるものも完全にはないものである。

其に考古学的研究が一般に財政的に容易でありこの科學が拍子に進んでゐる事は驚くに値しない數等と言ふものが若干の妨害を派司したがこれには抱かず恐らくはあと五十年も経てば世界の主要なる部分に於ける人間の過去についてのがなり明白なる繪圖が與へられる様に思はれるのである。勿論これは不朽の物件に反影せられてゐるその過去の此等の狀況に注意を向けてゐるものである。我々は古代の社會が如何なる種類の道具を使用してゐたかその社會の人間達は何を食してゐたかどんな家に住んでゐたか又死と言ふものについて如何に處理してゐたかについて發見する事が出来るが然し考古學は彼等が妻を笞打する事に耽つてゐたかどうかを我々に告げる事は出来ない。考古學的の仕事の直接明白なる目的が例へて人間の過去に關する我々の實際の知識を十分に充す可きものであると言つてもその究極の目的は文明の成長開花及び衰頽の中に含まれるその經過と斯る事柄に対して責任のある様に思はれるその要素についての一つの理解を我々に

に興へる事である。それは又歴史の研究の目的でもあるが書かれた記録がない為には考古学者は新しい技術、即ちその過程に於いては他の科学から借りて来たものであるがそれらを発展せしめたのである。彼は心的なもので或は陶器等の断片を化学的に分析する事から新しい貿易路の開始を跡づけたり年輪等の助けをかりて炭にされた材木の若干の破片より薪等の擦奪と言ふものの日付を記する事が出来る事に取扱はれるその廣汎なる期間によって彼が千年の期間に作用した動向及循環の動きを辨別する事が出来るのである。彼は歴史家が出来るない仕方では氣候風土の變化、燭燭の効果を測つて廣く地域に亘って文明の通路の地圖を描く事が出来る。考古学の特別な発見物は現代の書物に取扱はれてゐないけれども經過に關するその結論は文化的變遷の現象について研究してゐるに於いて人類学者の常識の一部になつてゐるこの様に彼等は若干の貢獻の中に反映せしめられてゐる。

#### 六(人類學)

人類學は今迄現存する社會生活又は消滅したとしても精々ごく最近のもので而も全く完全な記録が利用せられる社會生活の仕方を取扱つてゐる。各々の社會はこれ独自の生活法を持つてあり人類學者によつて所謂文化と呼ばれてゐる處の通りである。文化概念は人類學的探究者の

中で最も重要なる道具の中の一つである。この諸寄稿家の論集の中に於いてその論説の一つがそれに捧げられてゐる以上我々はそれを此處で扱ふ必要はないと同時に文化は今く如何なる社會の人々にでもある習慣考へ及び態度等の組成された意識を明白に示す便利を標識であるから如何なる人種考へもこの文化なるものを使はずして此等を議論する事が殆んど不可能である。人種學者の仕事は今なほ進行しつつある関心事たる文化を學び比較しこの事から一般に文化に對して真理を保つであらう結論を發展させる事である。何か他の科學的業績に於ける如くその才一步は此等の文化についての事實の蒐集である。そして人種學者の仕るは邊隅を凡ゆる場所や凡ゆる人々の中へと彼を連れて行く。ごく最近までは人種學者は彼等の實際の發掘活動を所謂原始民族即ち我が文明と呼ぶ若干の豊かな複合した文化の範圍外の生活する人々に限定して來たのである。斯る群が孤立すればする程をして更に廣く彼等の文化が我々自身のと異つてみればあるが彼等の中に興味が大きくなつてゐる。若しも未だかつて白人を見たことの無い様な一つの群を發見する事が出来るとして誰か名人工匠 (Craftsman) 即ちその生計が覆かされてゐるその名人を造る者等とせ乍ら地球の遠き隅を現在開發するを思ひめぐらすならばその古い傾向の人種學者は正にオセアニアに居る様々のものである。

落き時代の人種學者は事件の進展にこれ程心を勞してはゐない。我々自身と異つた文化



についての研究は、實験第一の技術の發展へと導き、就中夫等が文明化せられた社会や邊境中の文化に利用せられる時は、夫等の價值について一つも失はなぬ分離の態度の發展へと導いてゐる。アイオワ州の史実達の共同生活体についてよりも南海の孤島の土人を研究した方が遙にロマンティックであるが、然し同じ科學的方法が両方のものについて使用せられるのであり、両方とも重要な結果を興へる事が出来るのである。人類が共同体をなして生活し、種々特別な條件に適合する為に行跡を生活法を發展させ續ける限り、人類學者は技術上の失業の心に脅かされる事はないであらう。何故人類學者が全く原始民族について仕事しようとするか、疑問とせられるかも知れない。恐らく何か~~減~~減へと運命付けられてゐるオーストラリアの土人とかアメリカインディアンとかのある種、こいつ、ある種族の文化は我々自身の緊急な問題に合ふ様に役立せる為の報告として始ると何れも我々に與へるは出来なげに思はれるのである。實際一つの野る種族の研究は殆んど實際的價值を持つてゐない。然し一連りの種族の研究は後に比較したり分析したりして大いに價值があるかも知れない。社会科学は夫等の素材の眞の性質によつて物理学や自然科学でさへもこの取引に於いて主たる資產である統制せられた實際の技術を使ふことから拒否されてゐる。何人も實驗所の中に人類社会を置く事は出来なげに種々の刺戟にそれか如何に應ずるかを見る事も出来ない。唯一の代用物は感々が天等と云ふことである。

研究し記録する事であり夫等が觀察され得るその條件が皆々変わったものであればそれ又何處でも凡ての社会に對して眞であらう様な結論に到達する機会がますますよくなるのである。

人類学者の究極の目的は本質的には社会学者經濟学者一部は歴史家と同様である。凡てこの四つものは社会と文化が如何に作用して行くかそして何故如何に文化が変化するかを理解しようとする努力してゐる。彼等は條件のコースを豫言出来る様をそして究極は於いてこれを支配する事が出来る様なる普遍化一般の器法では所謂「法則」と言ふものに到達しようとして試みてゐる。

二方に於いて人類學化方に於いて社会学及び經濟学の間の主なる相異は後者が殆んど全く我々自身の社会や文化によつて與へられる論及の狭い構造内に於いて彼等の調査を遂行してゐると言ふ事がある。斯くして夫等は最近の二三百年間の我々自身の生活の仕方については特徴があるが社会生活については價値のない附随物でもない多くの要素を持つてゐる事は勿論の事である。若しも我々が我々の文化の大概の要素が殆んど変化をしない長い期間を越えても存続し乍ら爲に一つ一つの數へられる事が出来る様な時期に生活してゐるとすれば我々自身の社会に於ける條件の豫言や統御に對してはこれが十分であり得るのも尤もなるであらう。然し乍ら彼等が當然の事と思つてゐた條件が迅速に変化する時は期る狭い論及構造に基づく綜合普遍化は殆んど價値を持たない。

新しい文化型の興隆や古き型の消滅は斯る一般化から夫等の意味の大部分を奪取する。斯くして全体主義の國家に何が起るかを豫言する爲に過去五十年間の我々自身の仕事の循環性に基礎をおくこの普遍化を使用せんとする人間こそは非常に一人の樂觀的經濟學者でもあらう。現代の迅速にして根本的存變化の條件下に於いて價值ある爲には文化的社會的現象についての一般普遍化は打ち建てられた社會科學が取扱はうとした限りのそれよりも更に社會についての廣汎なる領域についての比較にその基礎を置かねばならぬであらう。

斯る一般普遍化は凡ての社會や文化が作用したその根本的原則即ち人類生存の公母体に立ち歸らねばならぬであらう。

斯る公母体を求めるるに於いて人類學者はある初期の利益を持つのである。極めて最近まで興味を中心であつた原始社會は大部分小さいものであり密集したごんまりしたものであり夫等の文化たるや我々自身のの比してけるかに單純でありよりよく累積せられてゐるものである。斯くして取扱はれる爲には殆んど價值が少いし従つて斯る社會や文化が眞に如何に働らくかを確めるよりよい機会があるわけである。

研究と言ふものが可能なる場合單純から複合へと進むべきであると言ふのは科學の一般規則である。従つて人類學者は彼の社會的文化的調査研究に於いて今日こそ正にこれを實行してゐる

のである。思純は社会に於いて意見をもちつが我々自身の社会をも含んだものと複雑した社会を理解するのに助けとなるのであらうと思ふを人類学者は希望し信じてゐるのである。更に人類学者の利益となる様に働いてゐる又別な要素は性向の異つた社会の研究家が人類学者それ自身のものを取返さずは全く不可解なるある程度の場合を有するやうも人類学者の仕事に近づくるが出来ると思ふのである。測への何なる人類も議論についての学問にあてはめる様な同じ完全には非人道的な教規で彼自身の種の学問に接近する事は出来なわけでも問題になつてゐるその社会が完全には彼が養はれてゐるその社会とは異つてゐる場合彼はもつとも必無にそれと接近して行くのが出来る一夫多妻の社会に於ける妻達が強くその制度に賛成してゐたり或は老人が彼等の精神病が愈りにも手に負へなくなつて来る時子供達に自分達を養はせてくれる様と頼みたりするのを覚悟して初めは衝動を受けるが後人類学者が向もなく総じて親しい語法になる様な心構へ展開するのである。即ち、成る程ある人は行ひある人は行はないのだと、この態度は何か秩序を内蔵成する場合避け難いものであるが比較研究法による学問にとつて必要とせられる。ある種の正確な報告を得る際には大なる助けとなるものである。高い道德的の目的は多くの境

過に於いては役に立つが科学的研究に於いては役並でない。  
 今更々に論議せられてゐる色々の亞科学こそ形式的訓練として而も多くの大学の課程の告示に

於て永久に記憶に留められるものとして人類学の内容を成示してゐるものである。然し乍らこの長く建設せられた中心に對して端の方の色の地域カに於いてはその方法の下に重要な発展がある。少くとも純粹科學の發展を助長せしめると言ふ観点から此等の中最も重要なものは個性と文化との相互關係を取扱ふ研究の新分野の出現である。ごく最近までは人類學者は社会及び文化の量的現象に彼等の研究を故意に限定して来た。彼等は個人と言ふものを單なる文化遷移者として、即ち一體その同様な而も相互に変化し得る單位の一として見做して来たのである。彼等は人物が如何にして文化的遷移者となつたのか又はある環境の下では何故人間がこの消極的役割と始めに行はれた文化交流と言ふものから離れたのちを掴まうと努力しなかつたのである。併し乍ら時が経つにつれ文化現象がよりよく理解せられるに到るにつれ此等諸問題の重要性は亦明白となつて来たのである。個人を取扱ふのにそれ自身の何かの技術がない爲に人類學者は個性心理學者に助けを求めて轉向したのである。

### 七(個性心理学)

個性心理学はその發展に於いて幾分同じ様なコースを述べてゐる。それは個人と言ふものに集注し、第一と自然科學の動物學の下に生理的基礎の上に凡ての個人的類似性と相異性を説明しようとした。個性の形成に於いて環境の重要性が固もなく明らかとなつたけれども先づそれは單純

各個人の相異を説明するのに使用せられたのである。文化の概念ゴッロツバムとは別な何れも文化と言ふ概念と親しくなかつた爲に心理学者は我々自身の文明の申す養はれてゐる凡ての個人と共に通ずる此等の経験の重要性を見落したのである。卒實彼等は此等の結果を大變當然の事と思つてゐたので彼等は夫等を説明する爲に色々な普遍的な本能を列べたのである。個性の規範と言ふものが異つた社会を文化に對しては異つてゐると言ふべきを發見した爲にこれが一つの衝擊となり延いては彼等の概念の多きを根本的に組織するものが必要となつて来るに到つたのである。個性心理学者の大部分が彼等自身以外の社会に直接の材料を得る位置に在り以上又彼等が記録された又は組織された文化的素材に對して何等技術を發展せしめなかつた以上彼等は人種学者に援助を求めて轉換したのであつた。此等綜合性の発展の結果は集注の新しい領域を出現せしめたのである。それは余生にも時期が早いの個性と文化の學問が性つきりした並科学となるかどうかを言ふ事は出来なから然し乍らそれは確かに複雑強勢の高度を表はしてゐるものである。それは僅かに二十年しかたつてゐないものであるが既に二つの母体たる此等の科学の両方に相當の影響を及ぼしてゐる。それは個性の形成の基礎となつてゐるその原則について既に正常なる個人の個性と言ふものが身につけてゐる様を形式の廣泛なる範圍について全くよりよい理解を心理学者に與へつゝある。逆にこれは人種学者の注意を色々な社会に對して基本的個性

型の相異と言ふものに惹き寄せたのである。即ち彼が取扱つたり説明しようとして試みないでも  
22 以前には認識してゐた何ものかに注意をひきつけたのである。斯る矛盾を通してこれは人類學

者が取扱はねばならない最も困難なる諸問題の一つの解決への道を指示しつゝある。彼の研究  
のごとく初期より人類學者は何故ある社会が特別の興味ある事象を展開したか何故實用性と言ふ  
ものの要素が何等含まれてゐる様に思はれない時に色々の更新を彼等が受容し又は拒否したか  
をその種族色々の文化が夫等の發展に於いて異つた然し一貫した傾向を表はしたかを發見せん  
と探求して来たのである。此等の矛盾はこれ迄歴史的な事件の所為に即ちその疑問の明らかな  
起源に歸してゐるものである。基本的な個性型と言ふものが存在すると言ふ事の認識も夫等が如  
何にして作られるのかの解釋について斯る矛盾と言ふものは各み込みのよいものとなりそ  
してある場合には屬性として歸し得るものともなるのである。文化変化の方法及び方向につい  
ては斯る事的重要性が過度に評價せられる事は出ない。

人類學と心理学との協力が恐らくは結果に於いて精確するとは言ふものの人類學は又一般的講  
問題の解決へ他の修學法を以て働いてゐるのである。人類學と社会学の間には考へと技術の着  
實な交換があつたのである。社会学はよい古い又更に哲學的を科学としてその概念と理論の數  
多量に於いて人類學をばるかに凌駕したのである。これは又人類學者に一般に知られてお

るものよりもはるかを超えたある点にまで統計的技術を發展せしめたのである。然し乍ら又それ自身を獨占的に我々自身の制度の研究のみで殆んど限定してゐる故にその結論の多くは本邦としての人類に利用し得ないし又は迅速に變化をすする條件その表々、自身の社会に對してさへも利用し得ないものである。人種學との接觸は社會學により小さい現代の共同生活體の學問に於いて特別の價値を示してゐる。新しい研究技術も提供した。又これは社會學の論及構造を大いに擴大し従つてその理論的構成のあるものに変化を齎したのである。事實その理論の水準に於いては二つ、科學が文藝早く融合收斂<sup>収斂</sup>して、あるので恐らく數年以内では何等重大なる相異が存在しない様に思はれる程である。

共同研究の別な意味の分野は食物の研究に於ける生体人類學、生理學及び人種學のそれである。最初にマロガレット・ミット博士の指導の下に於いて國立研究評議會の王唱の下行<sup>下行</sup>けられて来た。

この仕事は理論的を目的よりも寧ろ實際の目的へ向つて指導されて来た。その意圖が合衆國に於ける營養規準と言ふものが改善せられるべくして直接戰後期間に外國人口の攝食が更に効果的に遂行せられる可きこの基礎について報告を提供するであつた。この仕事に於いて人種學者の主たる貢獻は特殊なる群が適學に養はれるかどうかを決定する際に食習慣と言ふものは食供給と殆んど同様と重大なるものであらうと言ふ事の認識であつたのである。併し乍ら斯る考



向は種々なる食物に對して種々なる人類の可能なる生理學的調整即ちその研究は僅に始つたばかりの二つの分野と關係して重大なる意味が含まれてゐる様に思はれるでもあらう。諸科學を綜合合作すると言ふ事に關係して此等の協力活動に加ふるに人類學は最近應用科學の分野を捉へ始めたのである。この方向のその最初の旅行は全く理解し得らるものとして植民地の統治に關係してゐる。更に進歩的を植民地を有する國家即ち明らかに英國及びオランダは土人の制度を理解する事が植民地の政治を成功せしめる必要條件であると言ふるを苦しい経験に依つて學んだ彼等は又一般の個人が斯る理解を得らるは數年を要し彼がそうしてゐる間に高價な誤解を作り勝ちであつたと言ふるをも發見した。一方訓練せられた人類學者は土人の制度の性質を迅速に悉して正確に確める事が出来、この知識を簡素な役に立つ形へと通用させる事が出来た。現在の戰前前は植民地の助成者として人類學者の効用は急速に増大しつゝあつた。ゴビオ、コリアー (Gobio Collier) 委員の進歩的指導の下に彼等は我々自身のインディアンの仕事へと導き入れられてゐる。然し乍ら然しと例外なく斯る專門家達は政策の發展に於けるよりも寧ろ政策を成就する為の方法と手段を工夫する様に使はれて来た。服従した民族の幸福の爲に彼等がなし得てゐる貢獻は斯くして非常に彼等の優越者の意向に掛つてゐる。

土着住民との摩擦を最小限度にし夫等を統御する事を可能ならしめる眞の知識は土人の社會を

破壊したり彼等自身の利己的を目的の為にその文化を破壊せんと欲するなどの例に於いては、  
人武器ともなり得るものである。更に最近では人類学的理論や技術で訓練せられて来た多くの  
人は産業関係及び種なる社会的活動の任務の学問に此等を使用し始めた。この任務の究極の結  
果がどんなものとなるかを豫言するに未だ時期が早すぎる。時代への主なる寄與はそれが含ま  
れる社会の状態の診断に對して斯る学問に改良せられた方法を試すを意味する様に思はれるの  
である。人類学の目下の應用の大部分は人類学の材料及び技術を使用すると言つても生体人類  
学は又多くの實際の可能性をも持つてゐる。單に此等のうちそのものを引用すれば人類学者は  
ある *Dr. Stearns* 博士は齒や齒の弓形の大きさや形の人種的差異の廣汎なる學問を行つてゐる。  
此等の學問の基礎の基はアメリカの商店は種々の住民の需要に合ふ様に工夫された特別の入れ  
歯を發達させたのである。そして此等は非常に有益である事を示したのである。黒玉製の黒い  
歯は此は英國貿易に對して為されたものであるがこの歯を持つた上歯假底は著者の大巾にして  
おる所有物の一つである。生体人類学者は外國の市場に對して競争する商店に大いに役立つて  
あらう。大いさや形の種へに於ける地方的及び人種的差異についての材料を提供する事が出来  
るのである。彼等は又今次大戦中 *Permalloy* (磁鐵製) に對してよりよい飛行機の産  
品等々工夫する事と關係して使用せられており、彼等は對して鋼產品の企劃の戦後の發展に彼等

の役割をよと演ずるでもあらう。

### 結局

かゝる貢獻は重要性的の少いものであり、それが残つて

26 行くに付して書與するよりも寧ろ慰安と言ふものに苦慮してゐるのである。もつと更に重要なる

るは人類学が種々の人類群の様々な病氣抵抗や波等が繁殖するに最適なる温度湿度及び高度の條件を獲得してゐるその知識である。恐らく醫學に付つて發生するであらう廣汎なる人口移動に於いてこの材料は考へに入られる可きである。斯くして西アフリカの黒人は悪性のマラリアに對して高度の耐久力を持ち殆んど例外なくこの病氣を無菌者であると言ふ事は確立した事案である。斯る悪疫性のない人類群は西アフリカに局限しても成功する事は出来ない。逆に此の病氣にとって恰好な保菌物 が生存し而も以前にはその病氣が存在してゐなかつた場所へ西アフリカ人が流徙込んで行くのはその地方の住民に火を三營まで起すであらう。此の種々の實例は引用せられる事が出来るであらう。現在人類学者が住居としてゐる研究及び應用科學の種を種を方面に於いて此の調査は正式の人類学の領域と言ふものについての若干の考へを與へるに充分であらう。この科學の限界が何處に置かれる可きであるかと言ふ疑問が學然起つて來るが著者に對してはこれは非常に學究的なものである様に思はれるのである。

各科學は若干の他の科學の發展に寄與する事が出来るとして美等から相應した助けを受ける事が出来るものである。教養の間の現在の輪廓は僅かに彼等が取扱ふのに選んで來たその現象の中

に具つてゐる。そして時がたつにつれ斯る輪廓は何か外のものよりも更に情性とか大業のある部門のそれに屈した興味等に依つて維持せられる様に思はれる。人類学が人間の學向と言ふものの二水自身を關係させてゐる唯一の修學法では扱してない。

社会学、經濟学、歴史学、心理学及びより新しい地理学でさへも凡て元來は人間に關係させてゐるものなのである。人類学が以上のものと異なる眞は主としてその興味、廣汎なる範圍や何かの資源より材料を借り集めるその大なる理解にあるのである。人類学者と他の教養の研究者の間の増大しつつある協力はより古い人類学者のあるものに彼等の科学が明確なる教養として存在しなくなりはいかないかとの危懼を與へてゐる彼等は若し現在の傾向が續くならばそれはずいぶん手足を引を裂かれその出血断片はより古くより強い隣人間に散布せられるかも知れないと信じてゐるのである。

著者は斯る危懼は根據のないものと信ずるものである。否更に原始的なると文明的なるとを問はず人類の生存と言ふ凡ての方面をその領域に含むに充分廣汎なる新しい一つの人間についての科学の核心に人類学こそがなるであらうと言ふのが最もありそうに思はれるのである。

27 此等の手柄が常に専門家にとって必要である一方現在の緊急なる處置を要する捨て、おけない一つの要求こそは斯る専門家が現在まで蓄積する事が出来た智識と言ふものか一つの念感であ

る。而も斯る人間についての一般普遍化せられた科学と言ふものは種なる専門化せられた教義の人の協力を通して既に具現せられつゝあるのである。この科学の目的は凡ての科学の目的と同じものである。これは事件を豫言し結局は此等を統御すると言ふ一つの意圖を以てこれが取扱ふ現象中に含まれてゐるその経過連續を確めようと努力してゐるのである。人類の生存殊に入類の行為と言ふものの現象は非常に複雑であり夫等を知的な秩序に還元すると言ふ往きは今始められたばかりなのである。過去の世代の人類学者即ち彼等が認識する様になつたその文化の多様性によつて眩惑された人類学者は夫等について活氣のある普遍綜合化に達するの可能性を疑つてゐたのである。直ちに首肯せられねばならないのは群に於ける人類の態度即ち明白なる異例が少くない社会的文化的現象については何等かの一般普遍化を行ふに殆んど不可能であると言ふ事である。然し乍らこれに對する現象が秩序を持つてゐないと言ふ事を意味しない。どんな一般化でもそれは特殊なる論及稽造の假定から始まらねばならない。即ち一組の條件を論この條件の下にそれら眞を保つのであらうがこの條件と共に始まらねばならないのである。斯くして一つの親近なる實例を引用すればよく基本物理學等に述べられてゐる。落下物体の法則はその物体が眞空中で落下してゐると言ふ假定と共に始まる即ち現實の生活には決して出遇はない様な條件と共に始つてゐるのである。社会と文化と言ふものが働かうかわけ

ならぬといふの條件と言ふものは非常に複雑であり又非常に無数の變化し得る要素を含有してあるのである。これにも抱らず觀察せられて來た殆んど凡ての場合に對して眞實を保つてゐる進歩的なもの一般普遍化に到達する事は可能なのである。斯る普遍化は特殊なる現象の正常なる共存及び函敬的相互關係についても又種々様々なる經過についてもなされ得るものである。

左へ彼等が我々の思考に於いて「法則」と言ふ言葉と關聯する抽象的な性質に缺けておられる科學や自然科學の法則が具體的に示すよりもつと他い確率の要素を具體的に表現することとしても斯る一般普遍化に於ける條件の豫言に對しませねども猶價值ある指標である。夫等は夫等がその範圍内で眞實を保つ様に對峙せられてゐる。その論及構造がもつと明白に限界付けられるにつれて益々更に價值あるものとなるであらう。比て人間を取扱ふ科學と言ふものは相學を呈し、斯る一般普遍化を發展させしめて單純を強斷的をテストによつて此等の價值を證明して來た一般化と言ふものが形式的に述べらるべき所である。斯る科學の技術や概念の組織に於いては彼等は盲目的である。人間に對して現はれて來る科學の主要なる仕るは此等の一般綜合化といふものを共に引寄せせより廣い範圍やより大なる正確さを得た新しいものを發展させらるべきであらう。この統一がやつと始つたばかりである以上我々は其の特殊な貢獻に對して關係してゐる特殊化せられた科學の各々に今猶眼を向けねばならぬ。即ち特殊な科學と言つても各々は

我々の目下の諸問題の解決に対して寄與する事が出来るものをさすのである。故に現在の著述の中に含まれてゐるその貢獻を形<sup>式</sup>的な人類学の分野に限定したり又は貢獻者と言ふものを自分自身を人類学者と呼ぶ人々に限定すると言つた如何なる試みも今までなされなかつたと言ふ事はその理由の爲なのである。彼等が凡て人間に關する科學に於いて仕るの協力者であり而も人間や人内に影響を及ぼす現象を理解する為や人間の問題に対して解決を見出す為に若干の能力を方法で試みてゐると言ふ事で十分なのである。

Ralph Linton is Prof. of Anthropol. at Columbia University  
and Associate at the Amer. Museum of Natural History.  
His publications includes;

"The Material Culture of the Marquesas Island 1924"

"The Tarak, a Hill Tribe of Madagascar 1933"

"The Study of Man. 1936"

篠崎枝宮